



写真1 「コウノトリの舞」ステッカーを貼った「兵庫県但馬産こしひかり」



写真2 こどもたちとコウノトリ (1955年頃)



写真3 こどもたちとコウノトリ (現在)

トリは動物質のものであればほとんどのものを食べ、広く枝を張る広葉樹や松の樹上に枝を組み合わせ直径1~2mもの巣をつくり繁殖する。かつて但馬地域にコウノトリが生息していたのは、この地域が盆地であり、さらに円山川の氾濫原であるという地形的な特性が理由の一つと考えられる。開発が進んでも氾濫原である盆地の大半は湿田となり、周囲の小高い山は営巣地となって格好の生息環境を提供していた。この地域ではコウノトリは農業と共に生きる生物として存在していたことができるだろう。

第二次世界大戦後の食料増産の流れの中で、生息環境破壊(営巣木である松の伐採)、農業の使用(毒性が強く、残留性が高い)、生息環境改変(圃場整備による乾田化)による餌生物の減少と繁殖障害によってコウノトリは絶滅した。

2003年、兵庫県は国や市町の関係機関と、「コウノトリ野生復帰推進計画」を策定した。この計画の冒頭に、「これまで経済重視で進められてきた様々な社会システムの構築を見直し、コウノトリと共生できる環境が人にとっても安全で安心できる豊かな環境であるとの認識に立ち、人と自然が共生する地域の創造につとめ、コウノトリの野生復帰を推進する」とある。コウノトリの野生復帰は自然生態系としての田園環境を自然再生することだけでは達成できず、この環境を維持してきた地域社会までも再生する必要に迫られた。

**野生復帰の担い手**

計画を実行に移すため、2003年に、住民、各種団体、学識者、行政からなる「コウノトリ野生復帰推進連絡協議会」が発足した。大きな任務を担う行政は、兵庫県では、但馬県民局内に部局横断的なプロジェクトチームを作り、豊岡市はコウノトリ共生課を新設して、包括的に野生復帰を推進できるよう取り組んできた。

各種団体の中では、農業の取り組みによって、魚道や魚巢のある水路を設置する環境保全型の農地整備、転作田のピオトープ化、常時湛水稲作や無農薬・減農薬栽培からなる「コウノトリを育む農法」の確立、そして安全・安心な農作物をブラ

ンド化した販売促進が広がっている(写真1)。このような農業に取り組む田んぼでは、コウノトリが降りたち餌を採る姿や、近くに建設された人工巣塔でヒナを育てる姿がその風景の一部となっている。

コウノトリの野生復帰事業はコウノトリという絶滅危惧種の保全事業ではあるが、それぞれの主体がそれぞれの課題とする事業にコウノトリの名を掲げ、当事者として参画し、協働してあっている。このような取り組みが実現されているのは、野生復帰の究極の目的が、持続可能な環境調和型の社会を創ることだと地域の人々が認識しているからであろう。

**トライ・やる・ウィーク**

兵庫県では、「生きる力」の育成を図ることをねらいとし、公立中学校2年生が学校を離れ、地域の職場で5日間の体験学習を行う「トライ・やる・ウィーク」を実施しており、コウノトリの郷公園にも毎年数名の生徒がやってくる。

飼育体験や餌生物調査を通して、コウノトリがすみやすい環境は、生き物が豊かであるということを彼らは強く感じており、野生復帰の意義を仲間伝えていく。

**50年後の写真**

自由に舞うコウノトリのうち、豊岡を離れるものが現れてきた。コウノトリが少しの間でも居続けた地域では、「なぜコウノトリがここにやってきたのか」と考え始める人々も現れてきた。その大きな理由は、そこに餌生物があるからだといえよう。さらに定住をと考えると、たくさんの餌生物がいる豊かな環境が必要であることに行きつくのは容易であろう。実際、どのような取り組みができるかはそれぞれの地域の実態によるところである。ただ一つ言えるのは、コウノトリが持続可能な環境型の社会を考えるきっかけを運んだということである。

2枚の写真がある(写真2・3)。豊岡では、約50年かかって再びコウノトリとこどもの写真を撮ることができた。今から50年後、私たちはどのような写真を撮ることができるだろうか。

・・・持続可能な社会に向けて・・・

**コウノトリの野生復帰**

兵庫県立コウノトリの郷公園  
指導主事 磯田英昭

2005年9月24日、5羽のコウノトリが県立コウノトリの郷公園で放鳥された。一度絶滅したコウノトリが34年ぶりに飛翔した。

**野生復帰までの歴史**

兵庫県但馬地方でのコウノトリ保護の歴史は長い。江戸時代、コウノトリが時折渡来し営巣する山を藩主が禁猟区とし、明治、大正、昭和初期にかけて保護鳥や天然記念物に指定され、手厚く保護されてきた。しかし、第二次世界大戦後急速にその数が減少し、1971年には野生最後の個体が死亡し、日本に生息していた繁殖個体群は絶滅した。

個体数の減少が危惧されるようになった1955年、兵庫県および豊岡市では、どじょう一匹運動\*など積極的な保護活動が展開されるようになった。しかしその減少をくいとめるには到らず、1965年、日本では初めてとなる絶滅危惧種の保護増殖事業(人工飼育)が開始された。

この保護増殖は着手から24年を経た1989年、ロシア・ハバロフスク州から贈られたコウノトリから初めてのヒナ2羽が誕生し、やっとその成果を得た。その後飼育羽数は順調に増加し、兵庫県では野生復帰を視野に入れて、将来構想、基本計画を策定し1999年に兵庫県立コウノトリの郷公園が開園した。そして3年目となる2002年、飼育羽数は当初目標の100羽を超え、野生復帰の具体的な計画を策定する段階を迎えた。

**野生復帰計画—コウノトリは田んぼの生き物**

コウノトリはアムール川流域から中国東北部にかけて広がる湿地帯を繁殖地としている。コウノ

\* 餌不足を解消するため、コウノトリの餌となるどじょうを県内各地から持ちよる運動。